

# 木の家づくりに興味関心を持ってもらう

—子供に対しての活動、大工の重要性—

森と木のクリエイター科 木造建築専攻 坂本 一哲

## 1. 研究背景

私は幼少期、実家の建設に関わることができた。内装の仕上げやキッチンの組立などを行った。現在もメンテナンスをしながら家族が暮らしている。そのため、実家に対して愛着を持っている。夏休みが施工時期であったので、毎日お弁当と大工さん用の飲み物・お菓子を持って通った。一日中被りついて見ていた。毎日がワクワクで、大工さんの仕事を見るのが楽しかった。大工さんに憧れた。今思い返すと、私がした体験は貴重な物であったと思う。

しかし、日本の価値とも言える職人は減少し続けている。大工職の減少は急速である。他の建築業に比べ高齢化も深刻で、20年間で約30万人、40年で1/3にまで減少している。



## 2. 研究目的

本研究の目的は、子どもに対して大工さんの仕事や木の家づくりを体験する機会をつくることで、興味・関心を持ってもらうことを目的とする。10年後に大工になる人や、20～30年後家を持つ際に地域の木材を活かしたものを選ぶ人が増えて欲しいという思いがある。また、卒業後も子ども向けに活動を続けていきたいので、ワークショップのベースとなるアイテムを作成する。

## 3. 方法

住宅業界・職人の現状を情報収集して、大工減少の原因を考察し、課題解決の方法を考える。

木の家の良さを伝える取り組みについては、先行事例を調べ、現状も把握し、自分なりの伝え方を考え、実践する。

## 4. 住宅業界、職人の調査結果

新築着工件数は人口減少、物価高によって減少傾向にある。空き家が大量に存在し年々増加しており、改修の需要も増加している。

建築業界全体でみると、事業者数は増加しているが、大工職と左官職が減少している。このまま減少し続ける場合、空き家を改修する前に大工が居ない状態に落ちうる。近い将来、改修のできる人材が必要だ。日本の住宅を未来の価値として残すためにも、大工の力が必要不可欠である。

大工減少の最大の原因はプレカットの普及によるものが大きい。20～30年の間にプレカットは100%に近い普及率になっている。プレカットが普及したことで、大工の手仕事が激減し、若者も少なく技術の継承が難しくなっている。分業化とスピードによって一般人が関わる機会が減少しているのも問題である。

## 5. 事例の調査結果

### ・くむんだー

木組みのジャングルジム。大工、工務店、設計者などが会員として所属。17県24団体が日本全国に点在している。山のことから、建築のことまでをわかりやすく説明し、ジャングルジムの組立、遊んで、解体までを子供たちと一緒にやる。一度の開催で約30人参加できるような規模。イベント会場やワークショップのメインコンテンツになる。各団体で開催内容は多少異なるようだが、アイテムの木組みのジャングルジムは基本同じ作りになっている。開催の資金はイベント開催側や、行政の支援などによって成り立っている。

### ・木組み巨大シーソー

高山市の大工集団こうこう舎さんが行っている。木組み使用した、巨大なシーソー。片側3人計6人乗れるシーソーを子どもたちと一緒に作る取り組みをしている。子どもたちは手すりの作成。大工に少しでも興味・関心を持ってもらいたと活動している。

### ・ミニチュアハウス

シックハウスなどの住宅に対する疑問を持った女性設計者が中心となって、結成したNPO法人もくの会さんが行っている。実物の1/3の木組みの模型を使用し、子どもたちに木の家について体感的に伝えている。こちらも、事前に山や森の話、建築との繋がりなどを話してから行っている。

## 6. 考察

どの取り組みも、特徴があり参考になる部分が多くあった。家づくりに直結する形のは少なく、山、川、家づくりを全体的に伝える取り組みがほとんどで、プログラムが組まれているものが多い。自由度の高いアイテムがあってもいいのではと感じた。規模の大き

いアイテムは開催や部材の大きさなどから開催に少しハードルがある。

### 【なぜ大工を増やすのか？】

改修は新築とは異なり、細かな大工の技術が重要になって来る。知識だけではだめで、経験が必要になる。手仕事の出来る大工が必要。大工は今後の日本の価値として残さなければならない存在である。

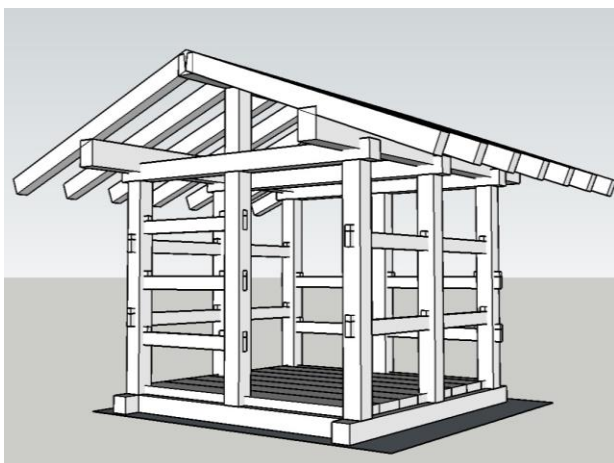
### 【大工を増やすためにはどうすればいいのか？】

賃金を上げる、休みを増やす、教育者の育成など労働環境改善人材育成が必要である。このような取組みはすでに行われている。

問題なのは家づくりの見え方、過程が子どもに対して魅力的に感じない。見る機会がないことだ。したがって私は「木の家づくりは面白い！」と子どもたちに体験、知る機会をつくりたい。

## 7. 実践

### 「キグミニ」



### 【コンセプト】

- ・小学5年生(私が体験した学年)未就学児でも大人と一緒に参加できる。
- ・一目で家と分かる家型(日本の家と言えば切妻)
- ・大工一人でも開催できるサイズ感(子どもが二人以上入る)
- ・乗用車に入る部材の大きさ
- ・大工の技術(木組み)で構成する
- ・子ども向けに作らない、本物に近いもの

### 【作成の流れ】

設計→材料調達→木取り→墨付け→刻み→組立

### 【製作期間・費用】

約1週間かけて作成、材料費は約2.5万円。合計約12万円。

### 【実践の場所】

- ・みち草プレパーク
- ・こども基地ねこのひげ
- ・みのっ子村

### 【開催時の注意点】

- ・づくり手が楽しんでやること。
- ・口をあまり出さずに行う。

・「楽しかった」「面白かった」と言ってもらえれば100点。

## 8. 結論

### 【実施結果】

- ・みち草プレパーク

棟を忘れてしまうという、ハプニングがあったが1年次に行った自力建設で養われた大工技術を駆使して、上棟まで行うことが出来た。今回は即席棟であったの子どもに崩されやすかった。しかし、棟を忘れたことで、子どもたちに作業姿を見せることが出来、私のことを大工だと思ってくれていた子どもが居た。実際に手作業で何かをつくることは人間の本能的に好きなのだと感じた。

- ・こどもの基地ねこのひげ

ここは高山市のリースクールである。2日間お邪魔して、実践を行った。1日目組立て1日置いて、次の日に解体を行った。今回は現地でクサビを作成。前回とは異なり屋内開催、2日間にわたって行った。長い間遊べるようにしておいたため、クッションを中に設置し快適な空間をつくっていた。他にも興味を持ち方にはかなりの個人差があるなど、新しい反応を見ることが出来た。

- ・みのっ子村

美濃市地域おこし協力隊が主催しているプレパークにお邪魔した。平日の放課後の時間を利用して行われている。今回もクサビを作成してもらい、プラスの要素として布を持っていった。布を使用し屋根を貼る子が現れた。行く場所で子どもたちが作る家は印象が変わった。周囲の環境、つくる人で家も個性が出て当たり前と感じ、「KIGU ミニ」をベースにどんな家が出来たのか他の場所でもやりたいと思った。

今後も、活動を続けて行き、徐々に家づくりへの考え方が変わると信じている。

### 【普及させるために】

施工者が前に出て行くことが必要だ。そのためには始めるハードルを下げるのが最も必要である。子どもが集まる場所に持って行き、少しの時間設置するだけでいい。「キグミニ」は開催ハードルを最大限下げつつも、可変性のあるアイテムであると考えている。図面、開催動画をアカデミーのHPやSNSで公開し、実施者に雰囲気を感じてもらおうと同時にリスクやどんな想いでつくったのかを伝える。

実施側にはSNSで活動報告をしてもらい、徐々に施工者の中で各地に広まって欲しい。直接仕事に繋がることはほとんどないと思われるが、それ以上に子どもや世間に与える影響は大きいと考える。個人が頑張るのでなく、ちょっとだけみんながやるのが大切になると考える。

卒業後は、子どもが憧れる大工兼設計者を目標に家づくりを楽しみます。